哲學研究　第三百四十八號　第三十卷　第三冊

印度に於ける業論について

松尾義海

一

印度に於ける業といふ觀念は、輪廻及び解脫と密接な關聯をもつたところの、他に比類のない特異な觀念である。業思想は古ウパニシャッドに現はれて以來永く印度精神界を支配して居るものであるが、こゝには特に印度二大敍事詩の一であるマハーバーラタ（mahābhārata）中に編入されてゐる有名なバガヴドギーター（Bhagavad-gītā 婆伽梵歌、單にギーターともいふ）に於ける業に對する見解を述べ、印度に於ける業論理解の一端と致したい。このバガヴドギーターは、クル王朝に於けるドゥルヨーダナ（Duryodhana）を首とする百王子とアルジュナ（Arjuna）を第三王子とする五王子とが互に封地——Indraprastha——を爭ふといふ一大戰爭に於て、アルジュナが親族師友相戰ふの悲痛に打たれ、戰爭を斷念せんとするに對し、婆伽梵（バガヴド）としてのヰシュヌ（Viṣṇu）の權化クリシュナ（Kṛiṣṇa）——アルジュナ王子の御者——が、利の戰の非なるを敎へ法としての戰を說くといふ、クリシュナとアルジュナとの對話の形式を以て書かれた一大詩篇である。この詩篇は紀元前二・三世紀から紀元後二・三世紀の間に成立したものと推定されてゐる。このギーターに於ては、業の觀念はその敎說の特に重要な要素となつてゐるのである。「業」といふのは、一般にはカルマ（karman）の譯であつて、カルマが「作る」とか「爲す」を意味する動詞の語根 √kṛ に由來する點からも分るやうに、廣く吾々の行爲を意味する言葉で、「行」とか「作」或は「作業」「事」などと翻譯さ

れてゐる。業といふ觀念は、既に古ウパニシャッド――――例へば Bri.adāraṇyaka-up. の如き――に於て、輪廻の觀念に結合され、現世の業が次の生を規定する、言換へれば行爲は滅するものではなくして、必ずその作し手に影響を及ぼし業報をもたらすといふ意味をもつやうになつて來たのである。卽ち業は輪廻の因として考へられた譯である。輪廻といふのは樂苦・幸不幸なる生の反復であり、これ等に超然たり得ない業の作者に對しては、その心を深刻に動亂する。從つて、業はその作し手に對しては、繫縛となるのである。ギーターに於ても、勇將アルジュナは、親族師友互に相戰ふ一つの「業」に於て「クリシュナよ、こゝに同族相戰はんとして布陣せるを見、我が四肢は萎へ我が口は涸れはて、震慄我が身に起り我が髮は逆立つ。ガーンィデーヴ（gāṇḍīva）の弓は我が手より落ち、皮膚は一面に熱し、立つこと能はず、我が心は紛糾するが如し」（I. 28-30.）といひ、王權の福樂のために一族殺傷の大罪を犯すよりも、むしろ武器を捨てゝ敵ドリシュタラーシュトラ軍の手に死せんと云つて、クリシュナに對し深刻なる悲痛を訴へてゐる。このやうに戰といふ業はアルジュナを束縛するのである。業は卽ち繫縛だといふことが出來る。繫縛はこれを離脫しようと希求するのが人情の當然であつて、この繫縛を脫したる境地は解脫（モクシャ）に外ならない。だから業が問題となるのは、この解脫に對する關係に於てゞあつて、如何にして業より解脫に到るかといふことが、ウパニシャッド以來の課題であつたのである。この業と解脫との關係が、ギーターの所說から如何に考へられ得るかといふ點をこゝに明かにしたいと思ふのである。それには先づ、業そのものについてギーターの說くところを討究しなければならない。

二

ギーターは「何人も一刹那たりとも、全く作業をなさずして住することなし、蓋し、人は皆自性（prakṛiti）所生の德（guṇa）により、力なくも作業をなさしめらる」（III. 5.）「一切の作業は自性の德によりてなさる」（III. 27.）と云つてゐる。だから作業をなさしむるものは自性の德である。それ故作業を理解するには、こゝにいふ自性とか德とかは如何なるものを指すかを先づ明かにしなければならない。ギーターは「自性と自我（puruṣa 單に我或は神我ともいはれる）とは兩者共に無始なることを知るべし」（XIII. 20.）と云つて、自性と自我との二實有論の立場をとるのである。自性は果と作具

(karya-karaṇa) 言換へれば肉體と感官の生起の原因であり、また諸の變異 (vikāra) は自性から生ずると說かれてゐる (XIII. 19-20.)。こゝに變異といふのは自性の變化したものゝ意味で、ギーターが他の箇所で自性として地水火風空の五大・意・感官・知覺・我慢（我執）を擧げてゐる (VII. 4.) のがこれに相當するものと考へられる。これ等は凡て自性の變化であり自性を出でないものであるから、矢張り自性だといひ得る。また作具卽ち感官として、ギーターは「十根」といふ言葉を使用してゐるから、眼耳鼻舌皮膚の五知根 (buddhi-indriya) と口手足及び大根小根の五作根 (karma-indriya) とが認められてゐた譯であり、これ等の諸根を統一する意根と合して感官は十一となる (X. 6.)。かくして自性は、地水火風空の五大及び諸の感官のみならず知覺・我慢をも含むことになるから、たゞ單に物質といふのみでは盡されない。自性は肉體のみでなく知覺・我執のやうな心的活動をも含んだ概念である。この自性に住して、自性より生ずる德を受用し、樂苦を享受する食者 (bhokṛi) が自我といはれる (XIII. 21-2.)。自我は樂苦の享受者ではあるが、作業をなす作者とはいはれてない (XIII. 30.)。作業の作者は常に自性側に歸せられてゐるのであつて、自我の方は享受者とか見者とか考へられてゐる。このやうな自性から善性 (sattva)・動性 (rajas)・闇性 (tamas) といふ三つの德が生ずる (XIV. 5.)。善性は無垢性であつて、樂に對する執着と知に對する執着とによつて住身者言換へれば身體に住する自我を繫縛する。樂とか或は知を自己に結びつけ「自分は樂しい」とか或は「自分は知者である」とかいふのは、凡て善性に基いて起る譯である。動性は欲を本性とするもので、未得のものへの渴望と既得のものに對する愛着とを生じ、作業に執着することによつて自我を繫縛する。闇性は無知から生じ、怠慢無精及び睡眠によつて自我を繫縛するのである。これ等善性動性闇性三者の各々は他の二者を壓倒して存するもので、善性が增大すれば知識の光明が現はれ、動性が壓倒的であれば貪欲・活動・作業の企畫・不安・渴愛が生じ、闇性が支配的であれば識別知のない暗黑・無活動・怠慢・迷妄が生ずる (XIV. 5-13)。かくの如く知識活動迷妄といふやうなものを自我に結びつけ、自我をして諸種の作業に向はしめる性質が三德である。三德も矢張り自性ではあるが、自性が活いて自我を作業せしめる方面を特に三德と見る譯である。作業はかくの如き自性より生じた三德から生ずる。だから自性・

三德は作業の能作者だといはれるのである。

ギーターは更に作業の因として所依（adhiṣṭhāna）・作者（kartṛi）・各種の作具（karaṇa）・種々各異の機能（ceṣṭā）・神的力（daiva）の五つを擧げて居り[2]（XVIII. 14.）、人が身口意によつて、如何なる作業をなしても、それが法（本務）として規定されたものでも或はこれに反するものでも、凡てこれ等の作業の因は右の五種であると云つて居る（XVIII. 15.）。自性とこれ等五因との關係については、ギーターも明かには說いてゐない。自性は右の五因中に含まれ得るものであり、少くとも前四者は自性側に屬するものといはねばならない。これ等五因は謂ば作業の起る基體とも云ふべきもので、作業は德の活きにより五因に基いて行はれるものといふことが出來よう。德は自性と別なものではなく、自性の活く性質に外ならないから、自性も德も共に作業の作し手と考へられてゐるのである。

以上述べたやうに、作業が德の活きにより五因に基いて起るとすれば、吾々が自性をもつて生存してゐる限り、作業は必然に生ずるものでこれを離脫することは不可能といはねばならない。だから「凡ゆる人は自性所生の德により、力なくも作業をなさしめらる」といはれ、また「知ある者も自己の自性に相應して作業をなす、生類は自性に隨ふ、抑制は何の用をかなさん」（III. 33.）とか或はまた「汝若し我慢に依止して『我れ戰はざるべし』と考ふるも、汝の決定は無益なり、自性は汝を强制すべし」（XVIII. 59.）等と云つて、作業が不可避であることをギーターは繰返し說いてゐる。

(1) Çaṅkara, Bhagavadgītābhāṣya, XIII. 20.

(2) 所依（adhiṣṭhāna）は身體を意味し、作者は作業の作し手を表はす。各種の作具といふのは耳等の感官を指し、種種各異の機能は出入の氣息を意味する。最後の daiva は眼等の感官を助けて活かしめるところの aditya 等の神をいふのである（Çaṅkara, Bhāṣya, XVIII. 14; Sacred Books of the East vol. VIII, P. 123.）。この第五因 daiva をラーマーヌヂャは最高我（paramātman）、內制者（antaryāmin）と解釋してゐる（Rāmānuja, Gītābhāṣya, XVIII. 14.）。

三

以上述べたやうに、吾々が自性に依止し身體をもつ限り、作業は避くることの出來ない必然のものであることをギーターは反復主張してゐる。だから自性に依存する限り、吾々が作業を滅して解脫を得ることは、全く不可能といはねばならない。併し吾々が作業を滅しようと希

ふのは、それが繫縛だからである、作されたる作業に應じて、樂苦幸不幸といふやうな深刻な影響が作し手に與へられるからである。卽ち作業が作業の作者を繫縛するといふ點に於て、作業は問題となるのである。併し、作業がその作者に影響し繫縛となるには、作業が作者の目的に反しこれを否定する點がなければならない。作者の目指すところは、いふまでもなく作業の果である。作業はその果と作者とが結びつけられることによつて繫縛に變じ、こゝに作業が問題となるのである。それでは何がこの結びつけになるかといふに、ギーターはこれを愛欲（カーマ）に求める。作業がその作者を束縛するのは、果に對して作者が執着するからである。だから作業は必然であつても、果への執着たる愛欲を滅して作業をなせば、吾々は作業の縛を脫し得る譯である。執着を離れて作業をなすといふ點は、ギーターが再三强調してゐるところであつて、例へば「汝の關與するところ（adhikāra）は唯だ作業にあり、決して果にはあらず、作業の果を動機たらしむる勿れ、無作業（akarma）にも汝の執着はあるべからず」（II. 47.）とか或は「執着を離れ常に作すべき作業をなすべし、蓋し執着を離れて作業をなす人は最高（解脫）に達するが故なり」（III. 19.）等と到る所に無執着の作業を說いてゐる。

併しながら、愛欲執着も矢張り德の活きであり、自性側に生ずるものであるから、自性に依存する以上執着を離れることは出來ない譯である。だからどのやうな愛欲を如何にして離脫し得るかは更に問はれなくてはならぬ。併しギーターの主要目的は、愛欲の原因——例へば無明の如き——を探求し、如何にして愛欲を離れ得るかといふ點にあるのではなく、むしろ作すべき本務としての作業の實踐といふ點が中心になつてゐる。ギーターは作業に專念すべきことを强調するのであつて、これをカルマヨーガ（karma-yoga）といひ、これによつて最高目的（解脫）が達せられるとなすのである。併し作業の實踐といへば自性を豫想し、自性に依止する限り愛欲の解脫は困難となる。只管作業をなすことによつて、愛欲に基く作業の縛を脫し得るであらうか。今少しくギーターのカルマヨーガについての所說を檢討して見なくてはならない。こゝにヨーガ（yoga 瑜伽）といふのは、この言葉が「結ぶ」を意味する動詞語根 √yuj から來た名詞であることからも分るやうに、元來或ものに對して心を統一することを意味する。カルマヨーガのカルマは、ギーターでは本來作すべき作業本務としての作業を意味し、

或は法（グルマ）ともいはれる。だから自己の本務に專念し、只管に本務を實修することがカルマヨーガに外ならない。だから註釋家シャンカラ（Çaṅkara）のいふ如く、カルマは卽ちヨーガだともいひ得る譯である。[2] このやうなカルマヨーガに關して、ギーターは更に次の如く述べてゐる。「攝心して（yukta）眞性を知れる者は、[3] 假令、見、聞き、觸れ、嗅ぎ、食ひ、行き、眠り、息しながらも、また假令、語り、捨し、取り、眼を開き、眼を閉づとも『諸根が諸根の境に活く』と憶ひ、『余は何事をもなさず』と考ふ」（V. 8-9.）「瑜伽行者（yogin）はたゞ身體・意・覺・感官のみにより、執着を捨て自我の淸淨のため作業をなす」[4]（V. 11.）「主（vibhuḥ）は世間に對して能作を造らず、作業を造らず、また作業と果との關聯を造らず、自性のみ活動す」[5]（V. 14.）。このやうなギーターの所說からすれば、作業の作者はあくまで自性であつて、自我は作者とすべきではない。作業の果と作者とを關係させる執着も、自我を作者として始めて意義をなすもので、自我を作者とせず自性獨り活動することになれば、最早作業が自己に對して束縛となる所以は消失する。併しこのやうに自我ではなくして自性を作業の作者と自覺するには、自我と自性との別異を知る識別知卽ち眞知がなければならない。かゝる眞知は後世數論教學（Sāṁkhya派）に於て說かれてゐる。ギーターもこの派名と同じサーンキヤ（sāṁkhya）なる言葉を使用するが、この場合のサーンキヤは知（jñāna, buddhi）を意味し、特に我の眞性知といふ點が强調されてゐる。[6] この點はシャンカラ及びラーマーヌヂャ（Rāmānuja）その他の註釋家達も說くところである。また先に引用した偈に「眞性を知れる者」とあるのも、註釋家に從へば矢張り我の知を有する者を指す。かゝる我の知へ專念することがジュニャーナヨーガ（jñānayoga）といはれる（III. 3.）。[7] このやうにギーターに謂ふサーンキヤはジュニャーナ卽ち我の知である。併しながら前にも述べた如く、ギーターは我と自性との二實有論をとるものであつて、この立場に立つ限り、眞性知或は我の知を得ることは同時に自性を知ることでなければならない。從つてそれは自我と自性との別異を知る眞知でなければならない。このやうな我の知は、ギーターが作業を說いてゐる中にも見出すことが出來る。卽ち第四章第十八偈に於てギーターは「作業（karma）に於て無作業（akarma）を見、無作業に於て作業を見る者は、人中に於て覺悟を有する者（buddhimān）なり、彼は一切の作業をなしつゝも攝心せる者[8]（yukta）

なり」と說いてゐる。シャンカラの註釋によれば、この偈は次のやうに理解される。作業に於て無作業を見るといふのは、世間一般では作業は自我（アートマン）に和合してゐると認められるが、實には自我に歸屬するものではないと知ることを意味する。言換へれば、自我の眞性を知れる者にとつては、作業は自性の事柄で自我は無作業だといふことである。併し單なる無作業はまた實には作業に外ならない。何故ならば、單に作業をなさないといふのは、身體及び意（根）の活動が停止して居るに過ぎず、作業の場合と同じく誤つて無作業が自我に歸屬せしめられ、「自己は寂靜なり、苦惱なく無作業にして幸福なり」といふやうな我慢を惹起するからである。このやうにして作業と無作業との區分を知る者は賢者（Paṇḍita）といはれ、一切の作業をなせる瑜伽行者と呼ばれる。[9] だから單なる無作業に止つてはならない。ギーターも「人は作業をなさゞることによつて naiṣkarmya を得す」（III. 4.）といつて居る。niṣkarma の狀態は單に作業のない a-karma ではない。註釋家によればそれは「作業をなしつゝ」得られる境地であり、無活動なる我の自相——niṣkriyātma-svarūpa——といはれる。卽ちそこには我の眞性を知ることがなければならない。從つて自己と作業の果とを結ぶ執着愛欲もまたそこにはあり得ない譯である。[10] かくの如く單なる無作業に止まらず、作業はあくまで實踐すべきであるが、その作業も實は無作業の作業、詳しくいへば自我の面では無作業自性の面では作業でなければならぬ。かゝる境地が絕對業ともいふべき naiṣkarmya に當るものと見られる。だから只管作業に專念することも、そこに我の眞知がなければ、それによつて自己と業果とを關聯させる執着に基く業縛は脫せられない。ギーターに於て、只管作業を實踐するヨーガと我の眞知を意味するサーンキヤ、卽ちカルマとサーンキヤとの一致が說かれてゐる（V. 4.）のも、かくの如き絕對業の境地に於て云はれ得ることである。

(1) 最高（Param）は mokṣa 卽ち解脫であり、アートマンに達することを表はす。シャンカラ・ラーマーヌヂャの註釋及びニーラカンタ（Nīlakaṇṭha）の Gītāprakāśa 參照。

(2) Śaṅkara, Gītābhāṣya, III. 3.

(3) シャンカラが眞性を ātmano yathātmyaṁ tattvam と云ひ、ラーマーヂャが眞性を知れる者を ātma-tattva-vit と註釋してゐる如く、眞性とは我の眞性を指すのである。

(4) 身體は沐浴等意、は憶念等、覺は眞理の確定、感官は婆伽梵の名號を聞き讃嘆すること、の作業をなす（SBE. vol. VIII, P. 64.）。自我の淸淨とは自我にある以前の作業の

繫縛を滅することを意味する（Rāmānuja, Gītābhāṣya, V. 11）。

(5) 主は ātman を指す、詳しくいへばそれ自體で安立し作者でない ātman をいふのである（シャンカラ・ラーマーヌヂャの註參照）。能作（kartṛitva）を造らずとは何人も作業の主體たらしめないことである。こゝに作業といふのは例へば ratha, ghaṭa 等の如き作業の目的物を指し、關聯は ratha 等を造る者とその結果との關聯である（シャンカラ註）。自性はこゝでは svabhāva であるが prakṛiti 或は prakṛitivāsanā と同義である（Çaṅkara, Rāmānuja, Gītābhāṣya V. 14.）。

(6) シャンカラによればサーンキャは最高實在（paramātmavastu）に關する識別知（viveka）を主題とするものであり、ラーマーヌヂャに從へば saṁkhya は知（buddhi）であり、知によつて確定さるべき我の眞性が saṁkhya といはれる（Gita, II. 39.）。尙、Gita, III. 3; V. 4, 5; XIII. 24 參照。

(7) この場合もシャンカラは知そのものが瑜伽であると解釋してゐる。複註によればこれは知そのものが梵と結びつけられる意味で瑜伽といはれるのである（Ānandajñāna, Çaṅkarabhāṣyavyākhyāna III. 3）。

(8) yukta は註釋家によれば、yogin（Çaṅkara）とか yogtyukta（Madhva）とか mokṣārthaḥ（Rāmānuja）等といはれる。

(9) Çaṅkara, Gītābhāṣya, IV. 18. ラーマーヌヂャによれは akarma は我の知（ātmajñāna）を意味する。karma に於て akarma を見るのは、カルマが實行されてゐるとき、我の眞性の探求によつて、知の面に於てカルマを見るのである。また akarma に於て karma を見るのは、我の知はカルマに含まれてゐるから、この知をカルマの面に於て見るのである（Rāmānuja, Gītābhāṣya, IV. 18）。後半はシャンカラの如く顯側の見としての akarma と見るのとは異るが、ラーマーヌヂャも、この前後兩方は共に我の眞性の探求によつて成就されるといつて居る如く、眞の karma と akarma とを知る根柢には我の眞性知がなければならない。シャンカラが作業と無作業との區分を知るといふのも我の眞性知によつて始めて可能である。

(10) 作業をなさざることによつて naiṣkarmya を得ずといふのであるから、naiṣkarmya の境地は作業の單なる無ではない。それはラーマーヌヂャのいふ如く、作業をなしつゝ得られる境地である。またシャンカラが naiṣkarmya は jñānayoga に專念すること（niṣṭhā）であり、無活動なる我の自相（ātmasvarūpa）に安住することであるといひ、ラーマーヌヂャがこれを jñāna-niṣṭhā（＝ātmaniṣṭhā）であると云つて居る如く、naiṣkarmya の境地には我の知がなければならない（III. 4; XVIII. 49 に對する兩者の註參照）。我の知の故にそこには kāma はなく從つて karma からの自由がある。作業をなしつゝ作業から自由である境地、卽ち絕對業ともいふべき境地が naiṣkarmya である。

四

かくの如く、ギーターが特に強調するところの、無執着を以て只管本務たる作業に專念するといふことは、單に作業の實踐といふ自性を豫想し自性に依止する行爲に終る限り愛欲の解脫をもたらすことは困難であつて、かかる作業專念の根柢には我の眞性知從つてまた自性との別異に對する自覺がなければならない。ギーターが自我と自性との二實有論に立つ以上この點は否定され得ない。若しかゝる眞知がなければ、「自己は何事をもなさず」とか或は「自性獨り活動す」といふ如く表現される無執着は出てくる筈がなく、從つてまた業の束縛も脫し得られないことになる。作業が自性側に歸せられてゐる點も、實は我の眞知からして始めていはれ得ることで、若しさうでなければ、自性ではなく己が作業してゐることになり、從つて執着があり繫縛は免れない。かくの如く無執着の作業は我の眞知に基かねばならない。併しこのことは、單に本務としての作業の實踐といふことからは容易には出てこない。單なる作業の實踐では直ちに我の眞知へ導くことが出來ないのである。眞知に基かない限り無執着の作業にはならない。そこでギーターは一切の作業を神に捧げ神のために作業をなすことを主張してゐる。婆伽梵はアルジュナに向つて「一切の作業を我れに捧げて…戰ふべし」(III. 30.) と勸める。卽ち「作者たる自分は〔自在〕神のために從僕の如くこれをなす」といふ覺悟(ブッディ)を以て一切の作業をなすべきである。[1] また「…何事をなし、何を食し、何を供養し、何を施與するも、また如何なる苦行を修するも、汝はこれを我れに捧げるものとしてなすべし」(IX. 27.)「パーンダヴ(アルジュナ)よ、我がために作業をなし、我れを最高者とし、我れを誠信し(mad-bhakta)、一切生類に於て愛着を離れ憎惡を捨てし者は我れに到達す」(XI. 55.)「…一切の作業を我れに捧げ我れを最高者とし、專一の瑜伽により我れを冥想しつゝ我れを信奉し(upāsate)、心を我れに固定する者に對し、パールタ(アルジュナ)よ、我れは遠からず死滅輪廻海よりの救濟者とならん」(XII. 6-7.)「汝は…我がための作業を最高とすべし、我がために作業をなしつゝ汝は成滿(siddhi)に到達す」(XII. 10.) 等といつて、一切の作業を我れ卽ち婆伽梵のためになし婆伽梵に捧ぐべきことを、ギーターは反復說いて居る。自己のために作業をなすのではなく、自己を捨てゝ婆伽梵のために、婆伽梵への愛のために、一切の作業をなすのである。[2] これは絕對の歸依であつて、ギーターに謂ふ

バクティ（bhakti 誠信）がこれに相當すると見ることが出來る。一切の作業を神に捧げることによつて、我れ卽ち神に到達し成滿――解脫――を得るのである。今こゝに引用した第十二章は、誠信品といはれ、常に攝心し誠信ありて御身――婆伽梵――を信奉する者と、不滅（aksara）・非變異（avyakta）なる〔梵〕を信奉する者と、何れが最もよく瑜伽を知れる者であるかといふアルジュナの問に始つてゐる。卽ち前章（第十章）の最後にいはれた者――我がために作業をなし我れを最高者とし我れを誠信する者と、以前に說かれた不滅梵の信奉者（第二章――第十一章）とが比較されるのである。[4] これに對して婆伽梵は「心を我れに固定し常に攝心し、最上の信仰（graddhā）を有し、我れを信奉するところの者を、我れは最上の攝心を得たる者と考へる」（XII. 2.）といつて、前者言換へれば誠信を捧げる者を最上のヨーガを得た者となし、不滅・非顯現なる梵への道は身體を有する者にとつて難行道なることを說き（XII. 3-5.）、次に一切の作業を我れ――婆伽梵――に捧ぐべきことを勸說する（XII. 6-7.）。註釋家もいふ如く、こゝでは我れ――婆伽梵――の誠信者に困難のないことが說かれてゐるのである。[5] 誠信者は身體の維持等の世間的作業から吠陀に規定された犧牲等に至る凡ての作業を我れ――婆伽梵――に捧げ、專ら我れのみを對象とする專一的瑜伽により我れを冥想しつゝ信奉しなければならない。だから一切の作業を婆伽梵に捧げ絕對に歸依することが誠信に外ならない譯である。ギーターは後章に於て、三德を超越し梵となるに適合する方法としてバクティヨーガ（bhakti-yoga）を說いてゐる（XIV. 26.）。只管誠信（バクティ）に專念するバクティヨーガによつて、始めて三德を超越し得るのである。この場合、誠信そのものが既にヨーガの性格をもつのであり、註釋家もバクティは卽ちヨーガだといつてゐる。[6] いまこゝでも誠信は最上のヨーガを得た者といはれる。そして三德は自性の活く性質であり、身體を有する者は自性を以て生存する者に外ならない。身體の保持者は身體に執着し、身體を自我と妄執する傾向をもつ故、我の眞知は容易には與へられぬ。[7] 我の眞知を得るには身體を超越するといふ點がなければならない。かくして、一切の作業を捧げ絕對歸依をする誠信が說かれるのであるから、いまこゝに於ける誠信もバクティヨーガといふことが出來る。かくの如く一切の作業を婆伽梵に捧げ、只管に歸依するとき、神の恩寵（prasāda）は與へられるのである。だからギーターも後に「常に一切の作業を

なしつゝも我れ――婆伽梵――に歸依すれば、我が恩寵によつて常住不滅の境地に達すべし」（XVIII. 56.）とか「心によつて一切の作業を我れに捧げ…常に心を我れに置くべし。心を我れに置けば、我が恩寵によつて、汝は一切の障礙を超越すべし」（XVIII. 57-8.）と說いてゐる。こゝにプラサーダ（prasāda）といふのは、註釋家に從へば、攝取（anugraha）であり、眞知（tattva-jñāna, samyag-jñāna）を生ずるものと云はれる。[9] ギーター自身も右にいふ如く、プラサーダによつて常住不滅の境地が得られ、一切の障礙を超越し得ると說いてゐる。かゝる境地は註釋家もいふ如く解脫に外ならぬのであつて、[9] 解脫には當然眞知がなければならない。プラサーダといふ言葉はギーターの所々に出てゐるが、第十八章第七十三偈に於て、アルジュナは婆伽梵の敎示を聞いた後「不滅の聖者（acyuta）よ、〔我が〕迷妄は滅盡されたり、御身のプラサーダによりて我れは憶念（smṛiti）を得たり…」と語つてゐる。この場合の憶念は、我の眞性（ātma-tattva）に關する憶念であるから、[10] 婆伽梵の恩寵は誠信者へ眞知、詳しくいへば我の眞性知卽ち解脫をもたらすものといふことが出來る。

以上述べる如く作業を凡て婆伽梵に捧げ、只管誠信に專念するヨーガによつて、婆伽梵のプラサーダに接し眞知が開顯されるのである。本務たる作業の實踐はこのプラサーダによつて我の眞知へ導かれ、かくして始めて、眞知を根柢とする無執着の作業が可能になる譯である。言換へれば本務たる作業の實踐としてのカルマヨーガは、バクティヨーガによつて眞のカルマヨーガになるとも云へる。だから前に關說したギーターに謂ふカルマ（作業）とサーンキヤ（我の知）との一致といふことも、實はバクティに於て始めて可能であると理解されねばならない。卽ちカルマヨーガとジュニヤーナヨーガとは、バクティヨーガに於て一致するといふことが出來るであらう。

(1) Çaṅkara, Gītābhāṣya, III. 30.

(2) 我がための作業（matkarma）についてニーラカンタはbhavatpriy-arthaṁ karma と註釋し、prīti（愛）といふ言葉を用ひてゐる（Nīlakaṇṭha, Gītāprakāça, XII. 10）。

(3) bhakti は、賴る、身を委ねる、隨ふ等の意味をもつ動詞の語根 √bhaj に由來する言葉で、賴ること、賴られるものを愛することを意味する（Bhandarkar, Vaiṣṇavism, Çaivism, P. 29.）。一般に devotion, Liebe. 誠信、信念、信愛、專念敬神等と譯され、註釋家は崇敬を意味するbhajana, ārādhna 及び sneha（愛）çarana（歸依）等の言葉を以て註釋してゐる。

(4) シャンカラ及びラーマーヌヂャの註 (XII. 7) 參照。
(5) Ānandatīrtha, Gītābhāṣya, XII. 6.
(6) Śaṅkara, Gītābhāṣya, XIV. 26.
(7) シャンカラ及びラーマーヌヂャの註 (XII. 5) 參照。
(8) アーナンダジュニャーナによればプラサーダは anugraha であり、眞知を生ずるもの (samyagjñānôdaya) といはれる (Ānandajñāna, Śaṅkarabhāṣya-vyākhyāna XVIII. 56, 62; vid. Nilakaṇṭha, Gītāprakāśa XVIII. 56, 62; Rāmānuja, Gītābhāṣya, XVIII. 75.)
(9) Nilakaṇṭha, Prakāśa, XVIII. 56.
(10) Nilakaṇṭha, Prakāśa, XVIII. 73; Śaṅkara, Gītābhāṣya, XVIII. 73.

五

以上述べるところによつて、本務たる作業の實踐はバクティによる我の眞知に基いて始めて愛欲なく無執着に行はれ得ることが理解された。無執着の作業であるから、それが作者を束縛する所以はない。それは作業でありながら業報をもたらさない作業、業から自由なる絶對の業であり、先に述べた naiṣkarmya である。これは、婆伽梵がアルジュナに教を說き終つた後「かくの如く祕密中の祕密なる知識 (jñāna) を我れは汝に說示せり、殘りなくこれを熟慮したる後、汝の欲するが如くに行ふべし」(XVIII. 63.) といつてゐるやうに、全く自由の作業である。

併しながら、ギーターが特に實踐を勸めるところの作業は、作すべき (kārya) 作業、卽ち法 (dharma) としての作業、或は定められた (niyata) 作業である (XVIII. 7.)。それでは法としての作業とは何をいふのであるか。婆伽梵は、戰爭に直面して悲觀逡巡せるアルジュナに向ひ、汝は自己の法 (svadharma) を顧慮しても動亂すべきではない、何故ならば、王族にとつては法としての戰爭より優れたものは他に存しないからである (II. 31.) といつて、戰爭への決意を促してゐる。またギーターは「缺陷 (viguṇa) あるも自己の法は、よく實行されし他の法 (paradharma) より優れたり、自己の法に死するは優れたり、他の法は「奈落等の」恐怖をもたらす」[1] とも云つてゐる。卽ち王族にとつては戰爭といふ作業が自己の法である。法とはだから、カストに於て作すべく定められた作業、言換へればそのカストの本務に外ならない。自己の法とは自己のカストに於ける法であり、他の法は他のカストに於ける法である。そして他法よりも自法の實踐が優れたものとして選ばれ、他法の實行は地獄の如き恐怖をもたらすとさへいはれる。前述の如く、

人が自性を以て生存する以上、作業はたゞ單に之を斥けることは不可能であつて、作業はその實行によらなければ絶對自由の業には到達し得ない。ところが實行さるべき作業は、右にいふ如く自己の法であり、嚴格なるカストに於て本務として規定された作業である。かくの如き法としての作業を、ギーターは次のやうに配分してゐる。即ち婆羅門の作業は、寂靜・自制・苦行・〔內外の〕清淨・寬容・知・識[2]・有神的信仰であり、勇取・威光・堅忍・伎倆・戰爭に於ける不退陣・布施・支配權は刹帝利の作業であり、耕作・牧牛・商賣は毗舍の作業であり、首陀羅の作業は奉仕を本性とするものである（XVIII. 42-4）。これ等の作業が四カストに配分された、本務としての作業である。これ等の作業も勿論、愛欲を離れ果を望まず、無執着を以て實踐さるべきことはいふまでもない。無執着の作業であれば、當然業の繫縛はなく、業より自由な作業となる。併し自由の作業になるとは云つても、本務たる作業そのものが既にカストによつて嚴重に配分され規定されてゐるのであつて、この點は絶對自由の作業とは矛盾する。それでは法として嚴格に規定された作業が如何にして絶對自由の業に轉換され得るか。前にも云つたやうにギーターは、一切の作業を我れ——婆伽梵——に捧ぐれば我がプラサーダによつて一切の障礙を超越し得る（XVIII. 57-8）と說くのであるから、カストの必然も婆伽梵の恩寵によつて克服し得るといふのがギーターの立場であらうと考へられる。そして毗舍にせよ首陀羅にせよ如何なるカストの者でも、我れに歸依すれば最高趣に入るといふのである（IX. 32-3）。カストそのものも實は自性所生の三德によつて配分された決定的のものである（XVIII. 41.）が、この自性の決定がプラサーダによつて自由へ轉換され得ると考へられてゐる。

前から述べてきたやうに、作業は、假令それがカストに規定された本務としての法であつても、凡て自性から生ずるものであつて、吾々が自性を以て存在する限り作業を滅することは絶對に不可能といはねばならぬ。併し作業が問題になるのは、それが繫縛であり業報をもたらすからであり、繫縛はまた愛欲に基いてゐる。そして愛欲は自我及び自性の眞相に暗いから起るものである。だから自我の眞性知、從つてまた自性に對する眞知によつて、始めて作業の束縛は斷ぜられる譯である。かゝる眞知は單に本務たる作業の實踐からは生ぜず、プラサーダに基くカルマヨーガによつて始めて導かれる。だから恩

寵によつて業縛が脱せられることになるが、恩寵は眞性知をもたらすといはれるから、業の繫縛を解脱するに我の眞知の不可缺なることに變はりはない。束縛の斷ぜられた作業は、既に述べた如く、絶對自由の作業であつて、作業そのものの無ではなく naiṣkarmya である。即ち、作業が無となるのではなく、本務たる作業はどこまでも實行されねばならない。このやうなことが以上述べるところによつて理解された譯である。

併しながら、無執着の作業といへども作業である以上、自性に基かずしては行はれ得ない故、ギーターの理論からすれば、かくの如き自由の作業も當然自性所生の作業に一致しなければならない。ところが自性所生の作業は嚴格なるカストに限定されたもので、吾々はそこに個別を感じ束縛を受けるのである。併しこのやうな感じを受けるのは、作業が自性の所生であるといふ自覺を缺ぎ、自己の所生と執することに基いてゐる。自性から生じたものといふ自覺があれば、先に「自性獨り活く」と說かれた場合の如く束縛はない筈である。束縛がないのは自性の根柢に我の眞性知があるためである。自性によつて作業が個別的に配分されると說かれてゐるそのこと自身が、實は我の眞相に於て見られた事柄である。自性所生の業といふことも我に基いて始めて可能なのであつて、自性も本來は我によつて在ると云はなければならない。自性の面に於て個別的に配分された作業も、我の面に於ては個別を超越した謂ば普遍的な業としての一貫性をもつてゐるのである。だから自性より生じた本務としての作業が naiṣkarmya と一致し絶對自由の作業となるには、自性が我と卽するところがなければならない。ギーターが我と自性とを共に「我が自性」言換へれば伽梵婆の自性と說いてゐるのは、かかる點を顯はしてゐるものと理解される。この場合、我の面は「上の自性」(paraprakriti) と呼ばれてゐる (VII. 4-5.)。そして一切生類はこの自性を胎(ヨーニ)として生れ、我れ——婆伽梵(バガヴァット)——は世界の本源 (prabhava, utpatti.) にしてまた終末 (pralaya) だといはれる (VII. 6.)。屢述べる如く作業は自性から生ずるもので、我は作者とはいはない。併し自性獨り活くとは我の眞相に於て可能なことで、たゞ單に自性のみが活動することはない。我が見者といはれる如く我の見ることがなくては自性は活き得ないのである。だから我と自性とによつて活動は起る譯で、この全體を自性と見て萬有創造の本源となすのである。勿論我が自性を見て活

動が展開する根柢には執着があり、その活き全體が婆伽梵の自性であるとの眞知はない。かくの如く自性は萬有創造の本源であり、三德も勿論この自性より生ずる譯である（VII. 12, XIII. 20.）。だから法として規定された個々の作業も、結局はかくの如き婆伽梵の自性に由來する譯であつて、自性所生の作業も實には婆伽梵の作業だといふことになる。ギーターでは生類創造（visṛ-ja）が業とも呼ばれてゐる（VIII. 3.）が、この點は假令原始ギーターにはなく後の附伽であるとしても、[3] 我れは生類創造の本源だといふ右の如き思想傾向に相應するものと見られる。同じ思想傾向はギーターが犧牲（yajña）を說く場合にも現はれてゐる。犧牲に關してギーターは、犧牲より雨、雨より食、食より生類といふ過程によつて生類は生じ、更に犧牲は業の結果であり、業は一切に遍滿せる梵より生じ、梵は不滅より生ずるといふやうな世間輪を說いてゐる（III. 14-15.）。卽ち一切生類は犧牲より生じ、犧牲はまた梵に由來する譯である。この梵は一切に遍滿するといはれる如く、一切となる梵であるから、これは自性としての梵でなければならない。[4] また一切生類はかゝる遍在の梵と見ることが出來る。だから梵は犧牲によつて安立すると說かれるのである（III. 15.）。かくして、梵から一切生類に至る犧牲に基く世間輪は、要するに梵から梵に至る梵の自轉ともいへる。併し梵は更に不滅より生ずるといはれるから、この輪の轉ずる力は梵の由來する不滅に歸せられねばならない。不滅は前にも述べた如くギーターに於ては不滅・非變異なる梵と考へられたもので、「我が自性」といふ場合の萬有を展開する變異としての自性に對すれば、非變異なる婆伽梵そのものに相應すると見ることが出來る。從つて、犧牲に基く世間輪も婆伽梵の生類創造の活動として轉ずる譯である。この世間輪の考へは、假令原始ギーターには含まれなかつたとしても、[5] 婆伽梵を生類創造の本源となす思想傾向に合致し得るものであると同時に、犧牲に基く創造といふ點からいへば、世界の創造を犧牲の果となす印度古代からの思想を繼承するものと見ることが出來る。[6] かくの如く生類は犧牲によつて生ずるが、犧牲は結局最高我卽ち婆伽梵に由來する作業の結果であるから、生類の生ずることは、これを婆伽梵の作業ともいひ得る譯である。だから法としての作業も、究極に於ては婆伽梵の作業といふことに歸着する。自性から生じた個々の法としての作業が個別性を超越して naiṣkarmya に轉ずると共に無執着業が自性所生の業に一致するのは、この婆伽

梵の作業といふ一貫性に於てゞなければならない。かくして始めて我の眞相に徹し自性獨り活くといふ無執着の作業が可能になる。かくの如く見ることが許されるならば、ギーターに於ける作業と解脱との關係は、作業そのものに徹底すること、言換へれば婆伽梵の生類創造の作業に隨順することによつて、作業と解脱とが結びつく關係として理解することが出來ると思はれる。

最初に述べた如く、印度に於ける業の考へは、古ウパニシャッドの時代に輪廻思想と結びつき、それ以來善惡應報の思想として發展したのである。殊に佛教興起の頃には、王族庶民の階級が社會的な勢力をもつやうになり、最早吠陀によつて行爲の善惡を決定する必要がなくなつたため、日常生活に於ける行爲が反省され、從つて輪廻に對する關心が高まつてゐたことは、原始佛教經典に業輪廻の否定論者が擧げられてゐることによつてもこれを推察することが出來る。佛教に於ても、特に部派時代以後は、業輪廻に關する考察が愈〻精密になり、阿毘達磨はこれを中心課題となすものとさへ見られ得るのである。ギーターも矢張り、このやうな思潮に從つて業輪廻を認めてはゐるが、併し業の因を追求し如何にしてカルマの繫縛を斷ち再生の終滅を得るかといふ點は、少くともその主要目的とはなつてゐない。ギーターはどこまでも本務としての作業の履行といふことを目指したもので、カルマの實踐を通して、言換へれば業そのものに專念することによつて、反面に業の束縛を滅盡するといふ行き方になつてゐる。その結果として、輪廻繫縛をもたらす業といふより、むしろ婆伽梵そのものゝ業が中心となり、婆伽梵の業に隨順することによつて業縛たるカルマが滅せられるといふ形をとつてゐる。卽ち業は婆伽梵の業として始めて絕對自由の業に轉ずるのである。このやうな思想は古ウパニシャッドに於て見ることが出來る。例へば業を生ずる愛欲(カーマ)を我と一致せしむる立場は、當然業を我に歸し我常住なれば業また常住なりとの見解に導くもので、[7] 業に關する右の如きギーターの考へも、同じ思想傾向に合致することを現はしてゐると共に、更に古く生類創造を犧牲の果なりとする立場と密接な關聯をもつことを暗示するものである。以上述べるところは聖婆伽梵歌の作業に對する見解であつて、印度に於ける業論の一端を紹介したものである。

(1) gita, III. 35. vid. XVIII. 47.

(2) 知 (jñāna) は論によつて敎へられたものゝ知であり、

識 (vijñāna) は論の故の體驗を意味する (Çaṅkara, Gītā-bhāṣya, VI. 6; R. garbe, Die Bhagavadgītā, S. 97.

(3) R. garbe, Die Bhagavadgītā, S. 169; R. otto' Der Sang des Hehr-Erhabenen, S. 163. ふキンカホホはンの場合の業を祭祀 (yajña) ンとハヤる (Çaṅkara, Gītā-bhāṣya, VIII. 3.)°

(4) vgl. R. garbe, Die Bhagavadgītā, S. 94.

(5) R. otto, Der Sang., S. 148; R. garbe, Gītā, S. 168.

(6) Dasgupta, a History of Indian Philosophy vol. I, P. 22.

(7) Bṛihadāraṇyaka-upaniṣad, IV. iv. 5-6.